

人は環境で育つ

『大人問題』（五味太郎著 講談社文庫 2001 発行）の表紙に目が止まりました。「おとな『は』もんだい」「おとな『が』もんだい」「おとな『の』もんだい」とあります。「大人は余計なことばかりしてくれる!」と大人への批判があれば「大人も『生活に疲れているなら疲れている』と言えればいいよ」と労りも書かれています。

ブロックの組み立てをいつまでもしている小4の少女がテレビに映っていました。他の子どもたちは既に終わっていて、少女のお母さんは、娘の周囲を近づいたり離れたりしながらウロウロしています。お母さんの顔は陰しいものです。「誰も見ていなければ、代わりに自分がやってさっさと完成させてしまいたい」と思っているように感じます。このお母さんの悩みは、「うちの娘は何をやるのも遅くて困る。学校からも言われている。言っても直らないから、言い続けるしかない」というものでした。

お母さんの心理を勝手に想像すると、「先生から、文句を言われたくない。できれば、先生から『おたくのお子さんは、何をやるのも手際がよくて早いですよ』とほめられたい」のではないのでしょうか。さらに担任の先生の心理を勝手に想像すると、「一人だけ遅くて授業の効率が悪い。親に指導させよう」ということなのでしょう。「授業の進行を妨げないで!」と考える「大人『は』問題」だし、「親が説得して、先生の言うことを素直に聞く子にしてもらわないと!」と考える「大人『が』問題」のように思います。

何度ブロックが壊れても、そのつど再び積み上げるのは、相当集中力のいることです。諦めることなく、投げ出すことなくやりとげようとするその根気はすばらしいものです。大人が「早く完成させること」だけに目を向けていて、子ども本人に目をむけていないのは残念です。「早い完成=先生から非難されない」と考える「大人『は』問題」だし、「子どもがダメ。言いきかせなきゃ」と考える「大人『が』問題」のようです。先生にしても母親にしても、こうした「大人『の』問題」に、子どもを巻き込まないでくれ!と子どもは思っているに違いありません。

「問題な大人」でこのまま子育てしていくと、「代わりにやれる」チャンスがあればやってしまう親になっていくでしょう。「大学生の子どもの課題を、親が入力して提出する」「大学からの問い合わせに、親が代わりにメールを返信する」などの例は、決して稀ではないのです。インターネット環境が整備されたいま、だれでも「入力」はできます。ばれることなく成功していると親は思っているかもしれませんが、ばれています。子どもがマイナス評価を得ていることに気づきたいものです。

何回も同じ漢字を練習するばかばかしい宿題に、「カーボン紙を使えばいいじゃないか」というような父親だった。学校現場に父親がついているわけにはいかないから、自分が殴られたり立たされたりするのだが、「そう、孤独じゃなかったような気がする」（『大人問題』P.57）という個所を読んだとき、次々とクラスの子どもたちが完成させていっているところに、母親の怒りの視線が突き刺さりながらも、倒れても倒れても何度でもブロックを組み立て続ける少女の孤独感が一層際立って感じられました。

『大人問題』のあとがきは、「誰もが大人になれます。問題は、どんな大人を、いま大人であるひとりひとりの「わたし」が生きているか、ですね。まったくもって、子どもからみるなら、すべての大人は、もうひとつの環境問題ですね。」と結ばれていました。